

四十一

せうか。更に琉球臺灣は、……同じ日と月との許に生きて居る私共ではありますけれど、夫れ夫れの異つた四圍の物象に應はしい氣分に溢れてるのでせう。

とにかく私は今こんな氣持で去る夏休み頃の手帳のページを繰つて如上の歌を書きつけました。（十一月十日午後四時記す）

○

贊助員 岡 田 ひ さ

何故とおもはずたゞにすがし來しをとめのわれは安かりしかかな
自らが信せぬことをとく人の空虚のこゑをきくいとはしさ
あかぐと秋の日うけててれる山にふさはすわれの暗き心よ
見つむれば涙にじみ來夢のごと淡路の瀬戸にまたゝく灯
落葉たく煙ほそく立ちのぼる並樹の道をゆくまひるかな
冬枯の庭は淋しも風ふけば落葉枯葉のひそくとなく

歌

歌

文科四年生 岡 田 い し

夜はあけぬ日は高うなりまた落ちぬ汽車は西へ
となほも走れる

わかのれる汽車たゞひとりまよなかの大天地を
横きりてゆく

青丹よし奈良のみやこと知りもせで小草はむら
む春日野の鹿

いにしへの天の香具山なつの來てすかくしく
もみつえさすかな

つかれたる目には花かと汽車のまと葉うらの白
うひかる木を見る

心ふとからぬ罪得しこし母はまだ見す西
のみやこを

かへり来て電車のなかに身はおけとまた旅人の
こゝちこそすれ

田 邊

馨

ふといひし言の葉人につらかりきかく知りし時
涙ながれぬ
わが村の岸につきなはこの心忘れむと思ふ船の
中かな

風つよくふく夜は少さき我夢のたゞ安かれど祈
りてぞぬる

相 馬 芳 枝

書にもなく師にも學ばず我生の立場を何處如何
に求めむ
學び來て二十になり驚きぬモサイツクにも似
たる心よ

死ぬ場より辛く逃れて夢さめぬ生きむと悶く吾
なりしかな

救はるゝものならねども溺れ人藁どることちせ
めて書をよむ

何事も身細るまでは思ひえぬかひなき吾といつ
かなりにし

柳 下 三 己

けふの日のすべき事など數へつゝ朝起の鐘まつ
がたのしき

いつはらぬ我みづからをこの夏もあらはしにけ
り母のみ前に

音はせで葉なき梢のうらゆらく玻璃窓ごしの秋
のあはれさ